

# マイトーク MY TALK

## 第2号

発行：中央大学放送研究会OB会（会長／水上 虎馬雄）

住所：〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 中央大学放送研究会気付

発行日：平成9年8月1日



## わがマイク人生に悔いなし

梅雨空の6月11日、東京青山の「NHK文化センター」にOB会副会長の清田義雄さん（1期）をお訪ねし、放研の発足当時やNHKアナ時代のエピソードなどを語って戴きました。

### ◆大学三年の時に放送研究会設立

私は鎌倉大仏の裏手で生まれ育ちましたが、同じ鎌倉でも少し離れた郡部でしたから言葉もひどかったんですね。ですから人前でなんとか恥をかかずに話したいものだと思って、鎌倉学園で弁論部に入りました。今では受験校になって部も無くなってしまいました。今では受験校のある学校で弁論部OBにも立派な方々が居られ、私も全国大会で京都や大阪に行ったりしました。そのからみで、大学では初めに辞達学会に所属しましたが、アルバイトの関係で活動が滞りがちになっていたところ、放送研究会を創設する話を持ち掛けられたんです。

昭和二十七年で、私も含めて三年生が数人いましたが、むしろ一級下の二年生諸君が母体になって設



清田副会長

立の準備が進められました。会室も、初めは大講二階の扉の外側に長椅子と衝立てを置いた程度でしたが、中大OBでNHKの「二十の扉」や「街音」を担当していた長島金吾アナウンサーを講師をお願いしたりして活動をスタートしたんです。卒業後しばらくして放研を訪ねてみた時には、室も駿河台図書館の地下に移っていましたが、狭い中に皆がひしめき合っているという状況だったので憶えています。

### ◆自作自演のバラエティが大好評

ところで、放研ができた年の大学祭に、ひよこことから自作自演のバラエティショーを制作するためにになりました。当時、私は、毎日新聞に横山さんが連載していた漫画の主人公「デンスケ」の渾名を付けられていましたので、これのモチで「デンスケ初恋の巻」を三十分の台本に仕上げた。辞達の仲間や音研のピアノの協力で舞台に掛けました。デンスケがベコちゃんに初恋をするドラマ喜劇なんですが、これが大当たりとなり、ぜひ制作してくれということになって、翌年は「デンスケ入社試験の巻」というのを上演しました。バスケが面接で特技を聞かれ、「デンスケ踊り」を露したり、流行歌の「長崎の鐘」を歌ったり、の三十分が一時間にもなってしまうましたが、これもまた大好評でした。

今から考えると、まだテレビ放送が始まる前、バラエティショーを自作自演したわけで、場合によってはタレントや放送作家の道へ入れたかもしれないと思いますよ。結局、その後は、わりとまとまらず就職したわけですが、この時の経験はNHKに

でもいろんな場面で役に立っていますね。

## ◆NHKに入局し釧路に勤務

私は、放研の一期生であると同時に、放研からNHKに入った初めての人間なのですが、実は、就職は一年遅れているんです。今で言う就職浪人ではなくて、学生時代のアルバイト先の金融会社に滑り込もうとしたところ、その会社が倒産してしまい、やむなく再就職口をさがすことになったのです。ですから、二期の坂くんとも一緒にニッポン放送を受けていますよ。結果は、彼がニッポン放送、私がNHKと分かれたのですが、なんだか人生の岐路のようなものを感じます。

ともあれ、NHKの最初の勤務地は釧路でした。上野をSLで出発して、青森、函館、札幌、岩見沢と過ぎ、狩勝峠を越えて十勝、帯広経由で釧路まで、合計三十七時間の旅でした。当時は、まだ熊がでると脅かされるような辺鄙な土地で、おふくろなどは「なんにもそんな所へ行かなくても」とずいぶん心配していましたね。

NHKのローカル局は、四、五名のアナウンサーしか居ませんから、なんでも自分でやらなければなりません。放送というものは、人間社会のすべてのエッセンスが入ってくるんです。それを新米アナが引き受けるわけですから、失敗もずいぶんありましたよ。私は、どうせ北の果ての局なんだから、新人時代は多少の失敗は許してもらおう、と図々しく思っていました。

釧路局では、アナウンサーの泊が週二回あるのですが、午前零時になる終了アナウンスの「明日は何月何日何曜日です」と言うところを、日にちを忘れ

てしまい、「まもなく明日でございます」とやったことなどは今でも冷や汗がでますよ。

そんなこんなで、いろいろ失敗を積み重ねて新人アナもベテランになっていくわけですが、失敗を恐れず堂々とやるのが大成する秘訣ですね。

## ◆心に残る佐賀からの全国放送

初任地の釧路で二年半ほど過ごして、こんどは弘前に移りました。昔は青森県では弘前のほうが中心で、NHKも弘前にあり、その後、青森市に移転したんです。とにかく、熊の出そうな所から、いくらでも東京に近づいたと思っていたところ、なんと次の勤務地は、本州をビューッと縦断して九州の佐賀になってしまいました。有明海に臨んで佐賀平野が広がり、海産物も農産物も豊かな田園都市でしたが、「デンスケ九州に下るの巻」ですね。

あれは忘れもしない、昭和四十年九月十三日のことでした。朝七時のニュースの後、野村泰治アナウンサーの司会する「スタジオ102」というワイドショーの中で佐賀の風物詩を実況中継することになったんです。佐賀平野は干拓地でクリークという水路が発達しているのですが、そこに自生する水草から「ヒシの実」というものが取れます。これを半干しにして中の澱粉質を茹でて食べると、ホクホクしてとても美味しいので、農家の主婦が副業に取って町に売りに行ったりするんです。

この「ヒシの実」取りを私が実況中継することになったのですが、これが大変な難事業でした。実際の採取には、ハンギという直径一メートルくらいの「たらい舟」を使うんですが、元々が四斗樽を半分に切った「半切り」が訛ってハンギとなったもので、不

安定この上ない乗り物なんです。これにマイクをつけて乗り込んで、鍋蓋のような権でガブッガブ水をかき、取っている人に近づいてインタビュ、るわけですから命懸けでしたよ。

ところが、これが面白いと評判になり、それ全部で十回くらいシリーズで佐賀の風物詩を全流すことになったのです。

加藤清正が朝鮮から連れ帰ったという伝説のカチガラスが、高圧線の電柱に巣を作って危険で、文化財保護委員会の許可を得て九電の作業員を除去する「カチガラスの巣下ろし」では、電柱の途中まで上って足をガクガクさせながら「汗まじりのインタビューでした。

島原の乱が勃発し、佐賀藩士が不眠不休で有船を駆けつける時、糧を漕ぎながらついた餅状にして啜ったとの故事に因んだ奇習「佐賀平野すすり」では、私も実況中に試したところ喉にえて悶絶しそうになり、脂汗を垂らしながら放終えました。

## ◆意識は生涯現役アナウンサー

今でこそ、アナウンサーやレポーターが体験取するのが普通になりましたが、当時はアナウンサー、そこまでやる必要があるのかと言う人もかなりいたよ。しかし、私は、アナウンサーが背広にネク姿で農村などの取材をしているのは、茶の間の皆さま、本当のことが伝わらないという信念があったので自ら取材する環境に溶け込み放送することにより、めて視聴者の共感を得られるのですね。

この放送がきっかけになって、NHKでも民間も司様のレポートをするケースが増えてきまし

その後、転勤で佐賀県知事に挨拶に行ったら、佐賀の風物詩を全国に広めたお礼としてコーヒースーツを戴き、自分も少しは世の中の役に立てたなと思いましたが。

佐賀の後は和歌山でUHF局の開局に携わり、大阪、東京を経て最後は横浜に錨を下ろしました。大阪からはアナウンサーは廃業して、いわゆる管理職の立場になったのですが、二十数年間のアナウンサー生活から多くのことを学びました。けっして華やかな舞台に立ったわけでもなく、歴史に残る名放送をしたわけでもないのですが、できれば定年までアナウンサーをやり遂げたかった気がしますね。しかし組織人であるからには、それも叶わぬことですが、いづどのような立場に在っても、初任地の釧路で経験した失敗を肝に銘じ、言葉を大切にすることを意識を持ち続けていきたいと思っています。

(インタビュー 金野)

### メモランダム

小柄でがっしりした体躯から古武士の風格が感じられる清田さんは、昭和五年生まれで六十六歳。

「法曹界を目指したんだけど、難しすぎて、文字としてもっとやさしい放送界にしたいんです」と笑う顔には、放送に対するひたむきな情熱と愛情が伺えます。

「NHK文化センターでは、各先生のお世話役だけれど、自分でも生徒になって『書』を習っているんですよ」と目を輝かせるあたりは、往年のデンスケ氏の好奇心健在なりとお見受けしました。

## 創立45周年 実行委員会発足

六月二十八日、時期はずれの台風が本土に接近する中を、水上会長はじめ二十余名の各期幹事が大学記念館に集まりOB会幹事会が開かれました。まず、田中会計担当幹事から平成八年度の会費納入状況、今年度から始められた機関誌の制作、発送費などについて報告があり、満場一致で承認されました。左下に決算書を掲載しますので、皆さんのご確認をお願いします。

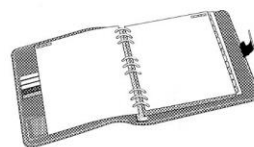
また、会費の納入がおもわしくない点に関しては、OB会の基本財源でもあり、機関誌送付の機会を利用して、未納会員に改めて協力を促すことになりました。

次に、金野幹事長から創立四十五周年記念式典の基本フレームについて提案があり、開催時期は来年七月下旬の土曜日の午後、会場は都心の著名ホテル、参加予定人数は二百五十名程度などが仮決定されました。記念事業に関しては、機関誌の記念特別号の発刊、インターネットのOB会ホームページの開設などが方向として出されました。

また、周年企画を具体的に詰める作業チームとして実行委員会を組織することになり、以下のような人員構成で取り組むことが決定されました。

- 実行委員長 金野涼二
- 実行副委員長 北島宏幸
- 記念式典企画委員 富田守貞
- 記念事業企画委員 砂岡茂明
- 渉外担当委員 黒川雅子
- 会計担当委員 田中克巳
- 竹間文子
- 川口 稔
- 松原 優

実行委員会は、幹事会の仮決定事項に基づき具体的な式典、事業などについて検討し、十一月までに概要を固め実施段階に移る予定です。皆さんのご要望を企画に盛り込みたいと思いますので、なんなりと委員または各期幹事までご連絡下さい。



平成8年度 中央大学放送研究会OB会決算書

収入の部		費	金額
会	費		1,158,180
前	年度繰越金		1,570,397
合	計		2,728,577
支出の部		費	金額
会	議費		21,012
通	信費		59,490
事	務費		750
印	刷代		127,000
慶	弔費		10,000
次	年度繰越金		2,510,325
合	計		2,728,577

平成9年6月28日 会計 斎藤 進 (5期)  
河合昭次郎 (11期)

# AGILITY

OBアクティビティ

## 初夏の長良川鵜飼旅情

東京都 13期 前田紘子

昨年五月の「白門四十年会」発足がきっかけになり、私たち十三期も懇親会をやるとういうことになり、熱海、新宿と寄り合いを重ねて、今年は岐阜長良川へと繰り出しました。

時は五月三十一日から六月一日にかけて、勢揃いした顔ぶれは、熊本から乗安、大阪から因田、東京から越、室岡、柳田、蛭田、前田、そして今回の幹事役である地元の渡辺といったメンバーです。

渡辺幹事の行き届いた心遣いに天も味方し、暮れなずむ長良川に屋形船を仕立て、伝統の古代絵巻に心地よく酔いしれたひとときでした。(ついでに船酔いまでした柳田さんは少しお気の毒でした)

それにつけても、鵜匠の手綱さばきは見事としか言いようがなく、操られる鵜たちの懸命な「お働きぶり」には、いささか身につまされる思いがしました。鵜匠の話では、なによりも日頃から鵜たちとのスキンシップが大切とのこと。なるほど、「お仕事を」をしていない時に、たえず鵜たちの頭や喉をスリスリ、などでなでしていたのが印象的で、これもまたヒントかなと思ったりして……。

おもしろうてやがてかなしきうかいかな  
さて翌日も上天気。仕事のある因田氏はお先に帰阪となり、残りは渡辺幹事の運転で信長ゆかりの岐阜城(金華山)へ。ロープウェイで山頂に立てば、



屋形船の中で大満足

見はるかす濃尾平野に戦国武将の野望と栄枯盛衰が偲ばれ、気も晴れ晴れする眺めでした。  
栄枯盛衰といえは「夏草や……」の句が思い浮かびますが、その俳聖の「一大紀行の筆を置くの地」が大垣。市内を流れる川のほとり、桑名、伊勢への海路に続く渡し場に立つ芭蕉と曾良の像をバックに

記念写真。昼食は、普通の小さなうどん屋ながら元人のみぞ知る名店に伴なわれ、そこでいただいたこしのある菌ごたえの「海老天入り冷やしうどん」の美味しかったこと!

そして、日本三大名瀑「養老の滝」へも足を延ばし、かの銘水を味わいました。夕べのお酒が過ぎなせいか、渴いた喉にはまさに甘露! でありました  
楽しく飲み、かつ語り、気分は学生時代そのままに、古き良き日々から国家論にまで話題が及んだ一泊二日の旅。来年は因田幹事で大阪に集まろうと誓い合って、それぞれ家路へと向かったのです。

## 秋の箱根路アンコー節

東京都 15期 富田守貞

私たち十五期は、毎年交互に大旅行と小旅行を繰り返していますが、昨秋、十一月二十三日から二十四日にかけて小旅行を楽しみました。

勤労感謝の日、正午にJR真鶴駅に集まった面々は、安倍、壇浦、高村、堤の淑女たち、佐伯、中永広瀬、富田の紳士たち、金野は勤労に感謝せず夜からの参加になりました。

小春日和の真鶴半島をバスで突端まで行き、太平洋を肴にビールで乾杯。磯の香に誘われて口ずさるのは「ウーミーワーヒーローイナ、オオキイナーツ」なんとも表現力が貧困な世代ですね。

夜は、海を臨むリゾートホテル「一望閣」の大広間を九人で占領し、海の幸に囲まれてアルコールは急浸透。中永板前の料理自慢、安倍名人の陶芸談義、高村先生の税務相談などに花が咲き、堤酒豪の呂律が怪しくなる頃にお開きとなりました。

中央大学放送研究会OB会 第一回定例総会

平成七年七月二十日



1期～10期



11期～20期



21期～43期

さて次の日は、小田原から満員の箱根登山鉄道にのりかえ「彫刻の森美術館」へと向かいます。もちろん教養を高めるのが目的ですが、十二期の斉藤アンコーさんにもお会いしたかったのです。入場ゲートからの連絡に、何かかと飛び出してこられた「お懐かしやアンコーさん」。突然闖入した不肖の後輩たちを、VIPコーナーでもてなし、パルザック像の前で解説してくださったアンコーさんは、パーソナリティ時代と変わらない爽やかで歯切れよい「アンコー節」が健在でした。



芸術を語るアンコーさん

ロダン、ムーア、ピカソをはじめ、国内外著名作家の作品が、季節といっしょに生きている（パンフより）この美術館は、同じ作品でも四季折々の表情が鑑賞できます。久々に芸術に触れて歩き回るうちに、秋の日は傾きはじめ、心が洗われた気分になって箱根路を後にしました。斉藤先輩は、「彫刻の森」常務取締役として多忙な日々を送られ、週の四泊を箱根、二泊を茅ヶ崎の自宅という生活が五年目になるとのこと。貴重な時間を割いて戴き、改めてお礼申し上げます。

### 先輩・後輩旧交を暖める

東京都 17期 川口 稔

平成八年十一月十六日、一泊二日の行程で、十七期OB十四名+十九期五名の参加で鎌倉のシネマワールドと熱海へ小旅行を行いました。



鎌倉シネマワールドにて

今回は、十七期の旅行に十九期も参加したいとの要望で合同旅行が実現したものです。

初日は、たまたま鎌倉シネマワールドで「寅さん祭り」が行われており、我が吉田填一郎君がトークショーをするというので有志何人かで押しかけました。淡路恵子を相手に軽妙な司会ぶりでした。

夜は、日テレ系列の熱海の研修所を借り切り、深夜迄大いに盛り上がりました。十七期では度々同期会やら小旅行やらを開いておりましたが、十九期の皆さんとは卒業以来の人もおり三十年振りの再会は年月の経過を痛感させられるものでした。



熱海研修所にて

# ACTIVITY

現役アクティビティ

## 【春の番組発表会】

去る四月二十九日、「みどりの日」の名に相応しい見事な新緑の中、恒例になった「春の番組発表会」が、他大学の放研メンバーも含め六十人以上の参加を得て盛大に行われました。日頃の活動成果の発表の場として、DJ、映像ビデオ、ラジオドラマに加え、今年は三年ぶりのオリジナル「劇」を上演しました。



劇の1シーン

この「劇」は、古いOBの方々には放研活動として馴染みないと思いますが、観客の目の前のステージで生の演劇をするもので、また他大学放研では実施していません。マイクやカメラに向かって演技し、やり直しや編集ができるドラマとは違って、失敗が許されず、観客の反応もリアルに伝わってくる。「劇」は、出演者と観客との緊張感と一体感が勝負です。従って、構成や間なども十分に計算し、台本を練り、演技を工夫することで非常に勉強になるわけです。今回は、岩井劇団部長の書き下ろし「いしあたまの忘れ物」を発表し、私（横林）が主演しましたが、幸いにも大好評を博しました。写真はビデオからのプリントのため不鮮明であることをお詫びしますが、「劇」の雰囲気をお分かり戴ければ幸いです。

## 【これから活動予定】

中大は七月二十五日から九月十三日まで夏休みになり、放研は九月六日から九日まで三泊四日の夏期合宿を予定しています。合宿では、十一月初旬の白門祭と十一月末か十二月初めの秋の番組発表会の検討、及びレクリエーションが行われます。

今年の合宿地は越後湯沢で、五十から六十人位の参加者が新宿駅から貸し切りバス一台で現地に行きます。費用は一人約四万円程度で、ほとんどの部員が夏休み中にアルバイトでかせぎます。

現在、会員数は、新一年生が約三十名、二年生が十三名、三年生が十三名、四年生が十六名の合計七

十二名という大所帯になっています。新入生にはゼミを多数開講し、明日の放研を担う後輩のために先輩がアナウンスや機材の使い方などを指しています。

ところで、四年生の就職状況は、男子はほとんどが内定済みですが、女子は世間並みに苦戦しています。マスコミ関係は、試験は受けるものの全滅で、現在（七月四日）、一、二名が新聞社受験に続中というところです。

十一月初旬の白門祭、十一月末か十二月初めの番組発表会とスケジュールが続きますのでOB皆様、お時間に余裕がありましたら、ぜひ足運びください。

（OB会担当 横林貞

## CHK ホームページ発見

日本のインターネット人口が五百万人を越える

時代です。中央大学放送研究会もホームページを開設しているはずだと思い、ちよつと検索してみたところズバリ発見しました。洗練されたトップページに続き、委員長の声、春の番組発表会の告知と内容、過去の作品一覧などなかなかの出来栄です。

大学本体には立派なホームページがあり、学友会でも開設を検討しているとのこと。私たちOB会でも、創立四十五周年記念事業として企画検討することになりました。

このCHKホームページは、主要検索エンジンで中央大学放送研究会と入力すれば見つけられます。



# 長信・短信+

風のうわさ

**13期 川瀬芳郎さん** ◆卒業以来、放研の皆様には一度もお会いできないまま、いつしかもう五十路も半ばにきてしまいました。あの頃のことは、私の人生の原風景のように鮮やかに蘇ります。現在、九州の伊万里に単身赴任中で、家族は故郷の新潟県三条市におり、いつも九州と新潟を行ったり来たりしています。東京にも時々行きますが、なかなか皆様にお会いする機会がなくて残念です。

**16期 二村恒元さん** ◆シャ乱Q、福山雅治、松たか子、西城秀樹、角松敏生などの所属レコード会社BMGジャパンに二年前転職し、現在、邦楽本部の責任者として日夜ヒット曲作りに奔走しています。

**18期 大悟法安路さん**  
我々十八期にとり、今年は節目の年、五十才。長いようで短い五十年を思い、複雑な心境です。勤務地、渋谷での毎日は、考えるほどに、若者との肉体的、精神的ハンデを実感させられます。社会人として三十年弱、まだまだ先は長いようです。ともかくも、丈夫な身体に生んでくれた、おふくろに感謝しましょうか。

私事ながら、本年、無事に銀婚式を迎え、女房と久しぶりに二人で四国に小旅行。「銀婚式」など他人事かと思っていたら、我が身のことでした。ゴールの見えない人生。女房に感謝です。

**19期 福田好朗さん**  
昨年四月より、新しい職場に移って一年と少しを

過ごしたことになる。現在は、法政大学工学部の経営工学科教授として、学部の新産システム設計と情報処理ならびに大学院の新産システム特論を担当している。情報処理技術を使った生産システムがどのように変わっていくのか、生産システムをどのように設計していくのかを教えている。現代の技術と環境を基礎とした分野なので、過去の知識の切り売りもできないし、現代の技術に対して知識の無い学生に難しいことを教えるわけにもいかず、授業をどのようにするか悩んでいる毎日である。

ところで、大学を視点を変えて見てみると今までと違ったものが見えてくる。昔は、学生の時の視点で大学を見ていたので一面的な記憶しかないが、教員になってみると色々なことが見えてくる。

まず、大学は一つの町であると言われるが、まさにそのとうりで、交通事故で死んだり、怪我をしたりはするのはいる、ノイローゼで登校しなくなるのはいる、酒の飲み過ぎで救急車の世話になるのはいる、授業中に病気でたおれるのはいる、なにしろ様々なことが起こる。それでも、まだ、学生運動が華やかだったころに比べると平和な時代であるようだ。

次に、入学試験も、学生時代には考えもつかない一大事業である。試験問題の作成、試験方法の検討など、十八歳人口の減少を反映して、一年中検討が行われている。また、スポーツ推薦入試、留学生入試、高校推薦入試、帰国子女入試、大学院入試と様々な入学試験もあり、年中何かがある。この調子でいくと、大学生を確保するため営業に出されるのではと錯覚させられる。

そして、最後に、学生時代には考えもなかった大学の運営、教授会の決定による自治である。何を

## セピアのアルバム

### 白門祭の花形!

昭和四十二年白門祭、当時は大学紛争（学の間では「闘争」と言っていた）華やかなり頃であり、写真のスタジオも前年度に大学側り、管理をまかされた学生会館の一階に大々にしつらえたものです。

白門祭期間中、音鑑室より機械を持ちこみ聴（観）衆も多く、立見の学生も数多く居たの盛況でした。残念ながら、この学生会館

翌々年閉鎖されてしまいました。が……。

当時の会員は総勢百二十名と、大世帯でつた為熱気は変なものでありました。報道組、ラジオドラマ、ディスク、ヨッキ、ス、イツ番組等々日間、朝九時から夕方六時頃まで間断なく番組放送されたの憶えております。





決めるにも教授会が開かれる。百人近い教授、助教による討議があつて、些細なことから、重大なことまで決められる。自治であるから非効率な承知のうえであるが、システムに慣れていない新任教員は戸惑うばかりである。いまに、慣れてしまつて教員らしくなるのであろうが、いまのところは、毎日が新鮮な日々を過ごしている。

最後に、今年は就職担当でしたので、学生の就職にあたり、先輩諸氏にもお世話になりました。ありがとうございました。

### 19期 近藤恵美子さん

今、夢中になっていることが三つあります。

四月から、社会人向けの大学院講座と中央大学に通つていますが、もうひとつ、ご年配の方に中学生の英語、数学を教えていることです。

大学院講座では、中学生の意識と行動の調査研究をしています。教授の厳しい追求に頭を抱えている毎日です。二十数年、学習塾を通して子供たちの心の動きを追ってきた成果が形になればと必死なのですが、神戸での小学生殺人事件の犯人逮捕の衝撃も加わり、本当に大変な思いをしています。

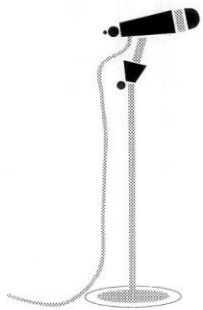
中央大学では、文学部教育学科で聴講生をしています。土曜の限、教育社会学、教職の講座です。学生がなんと二十人足らず！毎回出席するのは十数人。大教室の片隅でひっそりという思惑から大きくはずれてしまいました。二回に一回は休講ということを除けば有意義な講義で、学ぶことの楽しさを満喫しています。教育社会学の最初の講義は「学ぶことは心に誠実を刻むこと 教えることは共に未来を語ること……L.Aragon」で始まりました。涙が出るほどに感動してしまいました。

この学ぶ楽しさを共に分かち合っているのが、この春より我が主宰する塾へ通つてきているAさんです。彼女は、戦争のせいで中学校へ行き損なつてしまつた方です。どうしても中学校だけは卒業したいという積年の思いから、通信教育を受け始めました。月一回のスクーリングでは、わからないことだらけ。私のところへ勇気を出して電話するのに一年かつたと通つていました。毎日学校に通つても落ちこぼれの出るなかで、一単元一時間のスクーリングで全てを理解しようというのは無理なこと。まして、覚えるのが大変な年齢になっています。格闘技に近い授業になっていますが、むしろ教えられているのは私の方なのです。なんとか高校に進学できたらと、私の方が熱くなつていっている昨今です。

### 20期 西野 緑さん

◆静岡市役所広報課の仕事で

アナウンスを担当。市のお知らせ、選挙広報、動物園や市民プールの案内などをテープに録音しています。また、子供たちが社会科で見学に行くような清水港や工場施設などの紹介ビデオのナレーションもしています。最近、県文化財保存のために製作中のビデオのナレーションに携わりました。様々な文化が、口伝えなどに頼つていて廃れてしまうことを恐れ、文化人類学、民族学の先生方が中心になって、ビデオに記録していこうというものです。日常の身辺にありながら、こんなことがあったのかと初めて知ることも多く、仕事の意義を実感しています。



## ホワイトボード

### 「お詫びと訂正」

■創刊号の記事に誤りがありましたので、お詫びと訂正をいたします。

副会長 桃川龍一さん(2期) ↓ 熊倉勝利さん(8期)

■各期幹事の方々の中に訂正と変更があります。

変更 14期 津曲さん ↓ 荒井さん

15期 中永さん ↓ 富田さん

訂正 40期 稲村さん ↓ 榎田さん

41期 榎田さん ↓ 樋口さん

新たに新OB 45期堀田さん

以上

### 編集後記

「マイトーク」第2号を、お届け致します。

清田先輩のお話し、現役アナウンサー当時のご苦労話等面白く拝見しました。又、記事を寄せて頂きました皆様どうもありがとうございました。まだまだ若い世代からの原稿が少ないので、今後編集部よりの依頼のみではなく、各期同志の集まりやら、旅行等適宜、お知らせ下さいませようお願いします。

